

「思考力・表現力」を育む総合的な学習の時間の展開 ～探究的かつ協同的な学習の充実を通じた汎用的能力の育成～

室 長 村上 豊優

研究協力員

南関町立南関第二小学校 教諭 山口 伸一

指導主事 松尾 和子

研究協力校

熊本県立鹿本高等学校 教諭 富田 満秋（代表）

はじめに

本研究では、総合的な学習の時間において、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆるアクティブ・ラーニング）を推進し、探究のプロセスに体験活動と言語活動を適切に位置付ける。そのプロセスがスパイラルに高まる学習活動を通して、21世紀型能力の育成につながる具体的学習を展開し、3つの視点からアプローチを図ることとした。

また、本県の児童生徒の現状として、文章、図表やグラフ、観察・実験結果等の資料などから思考・判断し、目的や条件に応じて自分の考えを適切に表現する内容には、依然として課題が残るとされている（平成27年度義務教育課取組の方向における各重点事項の指標より）。さらに、文部科学省高等学校各教科等教育課程研究協議会総合的な学習の時間部会でも、探究的な学習において、特に整理・分析の活動の工夫改善が指摘されている。

これらのことから探究のプロセスにおいて、児童生徒が自発的・能動的に学び始める課題を設定し、整理・分析の活動においてタイミングや内容に応じて思考ツールを活用する。このような学習を通して、情報を処理・再構成し、自らの考えを明らかにし、表現する活動を一層充実させることにより、児童生徒の思考力や表現力の向上を目指すこととした。

1 研究の視点

(1) 視点1について

視点1の「学びを引き出す」（豊かな関わり合いのある言語活動を推進する）ためには、児童生徒が自発的・能動的に学び始める課題を設定することが重要である。そのため、児童生徒の学びが探究活動としてスパイラルに高まり、展開していくために次のような課題を設定した。

＜めざす児童の姿に向けて発展する課題設定＞

- ・現状から探究に向けての課題
- ・驚きの事実から必要感を高めた課題
- ・違和感が生じるように資料等を提示して生まれる課題

- ・体験活動等を通して生じた思い等から発生する課題

これらの課題が、児童生徒の内なる問いを引き出すものと考えられる。

(2) 視点2について

視点2の「学びを振り返る」（子どもたちの思考過程の可視化）については、「整理・分析」の学習過程に重点を置くこととした。総合的な学習の時間における図1の4つの学習過程におけるスパイラルな探究的な学習において、特に『収集した情報を、整理したり分析したりして思考する「整理・分析」』の学習が重要視されている。この「整理・分析」の活動において、タイミングや内容に応じて思考ツールを活用することとした。

この思考ツールは、ただ単に総合的な学習の時間のみで使用してもその効果は薄い。そのため、教科学習において、児童生徒の実態に合わせた思考ツールを活用することで、情報を処理・再構成し、自らの考えを明らかにし、表現する活動を一層充実させることにより、児童生徒の思考力や表現力の向上を目指した。

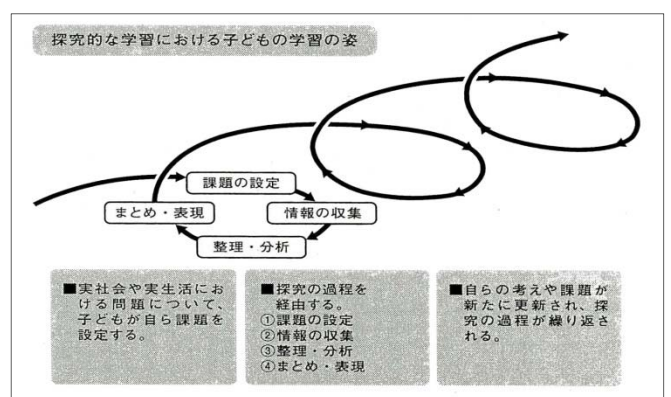


図1 探究的な学習における子どもの学習の姿

(3) 視点3について

視点3の「学びを支える」（学びのUD化及びICTの効果的活用）については、まず、児童生徒の実態を十分に把握（その学びや生活の状況を踏まえる等）しなければならない。その上で、保護者等の意向を入れながら、合意形成し、それぞれの基礎的環境整

備のもとで、適切な合理的配慮をする必要がある。

協働・協調的な学びを実施する上で、児童生徒同士がコミュニケーションを図る場面等があるが、一人一人の特性を考慮し、教育的ニーズに応じた配慮を進めた。

2 研究の実際

検証 1 南関第二小学校第 5 学年
単元名 「実りの秋だよ」
～「南関米に挑戦しよう」～

(1) 本単元の授業設計

① 児童生徒の実態から

南関第二小学校の総合的な学習の時間の年間計画の中の 5 年生の米作りにおいて研究を進めた。

事前の意識調査によると、本学級の児童は体験的な活動には意欲的に取り組むが、調べてきたことをまとめる際の自力解決やグループでの協同解決といった話し合い活動を苦手としている。

また、本単元の体験活動の中心である米作りについては、田植えや稲刈りなどの米作りの体験も半数程度の児童しか経験がない。そのため、本単元の米作り体験やゲストティーチャー（GT）との触れ合いを通して、米作りの課題を共有し、郷土に対する思いや将来への責任について、みんなで考える学習とする。

本単元の学習計画（抜粋）を以下の表 1 に示す。

表 1 本単元の単元計画（抜粋）

＜単元目標＞地域の宝「南関米」を収穫し、収穫を喜ぼう。そして、未来について考えよう。		
過程	主な学習活動	他教科との関連等
探ろう 「さ」	南関米作りの ふりかえり	社会科
考えよう 「か」	みんなで米を 見守ろう	GT
気付こう 「き」	収穫を 体験しよう	社会科 GT
伝えよう 「つ」	みんなに伝える 方法を考えよう	学級活動
行 動 し よ う 「こ」	米作りの将来に ついて考えよう	家庭科 国語科

② 学習課題の設定

本単元の探究的な学習活動における学習課題を「課題設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」の学習過程に沿って、次のように設定する。

ア 課題設定

【課題】

「おいしい南関米の秘密は何だろう？」（現状から探究に向けての課題）

社会科の学習と関連させながら、おいしいと評判の南関米に対する関心・意欲を高め、その栽培の工夫等の探究に向けての課題をもたせる。

イ 情報収集

【課題】

「その工夫は、おいしいお米作りにつながるのか？」（驚きの事実から必要感を高めた課題）

よりよい種もみを選別する作業や品種（ひのひかり）に応じた栽培計画などを GT より学び、その根拠などを整理してまとめる。

ウ 整理・分析

【課題】

「感謝の気持ちを伝えるためには、自分たちに何ができるのか？」～思考ツールの効果的な活用

思考ツールとして、マンダラチャートを活用し、子どもたちの考えや課題を出し合い、クラス全体で共有化できるようにする。また、この思考ツールを他教科で活用することで、そのツールが総合的な学習の時間だけに留まらないようにする。

エ まとめ・表現

国語科の学習と関連させながら、相手意識をもたせ、学習成果を発表した達成感を味わわせるようにする。さらに、米作り体験や後継者不足等に不安を抱える GT や地域の人々との人間関係を通して学んだ未来への責任について、仲間と共に考える。

【課題】

「自分たちが学んだ米作りは将来どうなるのか？」（違和感が生じるように資料等を提示して生まれる課題）

「将来、自分たちは、このおいしい米作りとどのようにかわっていくのか？」（体験活動等を通して生じた思い等から発生する課題）

(2) 検証授業の実際

① 本時の学習

<目標>南関米作りで様々な方々に協力してもらいながら作ってきたことから、感謝の気持ちを持ち、どのような方法で自分の考えや思いを表すことができるか、仲間と共に考えることができる。		
過程	主な学習活動	教師の指導と評価等
導入	1 学習の振り返り 2 GT の語り～米作りへの思い	○これまで活動してきた写真の提示。 ○事前に GT と入念な打ち合わせの上、米作りに対する思いを語っていただく。(写真1) ※電子黒板と写真
		
展開	<主発問>世話になった方など、たくさんの方へ感謝の気持ちを伝えるために何ができるか考えよう。	
	3 個人で考える。 4 お互いの考えをグループ内で共有する。 5 グループごとに発表して、全体で共有する。	○思考ツール（マンダラ）を活用し、個人で考えをもつ。(写真2) ○グループで自分の考えをしっかりと友達に伝え、互いの考えをまとめる。(写真3、4) ○発表に対して、よさを感じる事ができるよう発表に対して賞賛の言葉をかける。 ※思考ツール：マンダラチャート ※小黒板

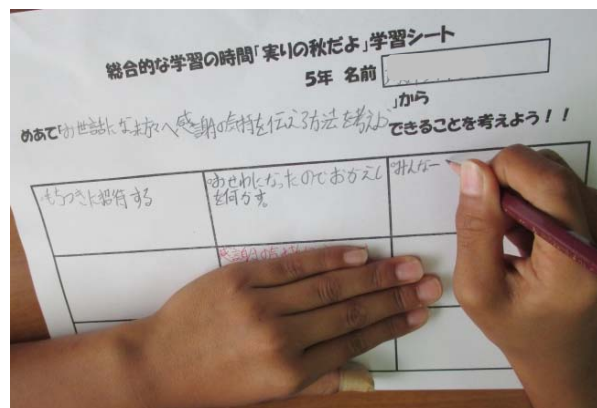


写真2 思考ツールを使って、個人思考



写真3 グループで意見交換



写真4 グループで小黒板にまとめる

まとめ	6 本時の学習を自分たちのことばで振り返る。	○今後より意欲的にするために、子どもたちのよかったことを積極的に評価する。(写真5)
		

写真5 学びの振り返り

(3) 検証結果と考察

① 思考ツールの活用

整理・分析の学習過程において、今回、思考ツールとしてマンドラチャート（3×3のマトリックス）を使用した。この思考ツールの活用を他教科（算数と国語）においても進めた。その様子を以下に示す。

ア 算数（三角形の面積の求め方を考えよう）

(考え方) マンドラチャート

わり算をする。	$4 \times 8 \times 1$ をする。	マスをつくらせて数える。
	三角形の面積	切って四角にする
4つの正方形に分けて計算	2つの三角形と1つの四角形にする	4つの三角形をあわせる。

正方形か長方形

(まとめ)
三角形の面積は切、て長方形にするか、2つの三角形をあわせて長方形にすると求められる。 2をかける

図2 算数における思考ツールの活用例

イ 国語（資料を効果的に用いる）

色やかたちが写真であるから、きりわかる。おぼえやすい	前のけかどくらべることできる	相手の人についてわかりやすい
	写真や表をつかうよさは	じょうきょうがすぐわかる
		なにについての説明がすぐわかる

表や写真をつかうことにより、分かりやすくくらべられる。

言葉をかざるもの、修飾語を使う、説得力がでる、必ず使うこと、図表、写真、グラフ、資料を効果的に用いるため、大切なこと

図3 国語における思考ツールの活用例

ウ 思考ツールに対する児童の意見

このように思考ツールを使って学習を進めることに対する児童の意見は、次のようなものがあった。

○考えやすいし、分かりやすかった。(15人)

▲考えるのが難しかった。(5人)

他に次のような意見が出された。

- ・いろいろな考えが出た。
- ・いろんなことが思いついた。
- ・自分の考えを書きやすかった。
- ・わかりやすくまとめられるのでよかった。
- ・だんだんと思いつき（アイデア）ができてきた。
- ・意外と使いやすかった。勉強しやすかった。
- ・すべて考えるのが難しかった。 など

② 意識調査の結果（事前：5月、事後11月）

意識調査の結果を次の図4～7に示す。

ア 学級の仲間との意見交換や話し合いなどを通して、自分の考えが変わったり、自分の考えを確かめたりしたことがありますか。

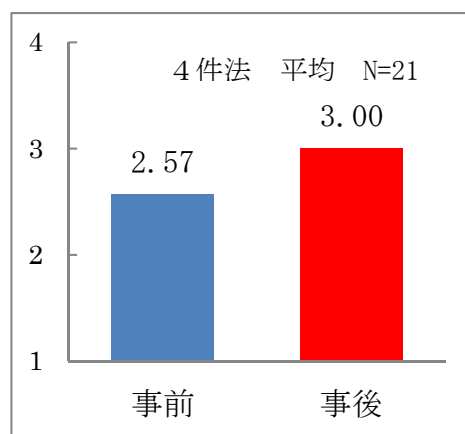


図4 意識調査①

イ これまで地域の人との交流を通して、自分の考えが変わったことがありますか。

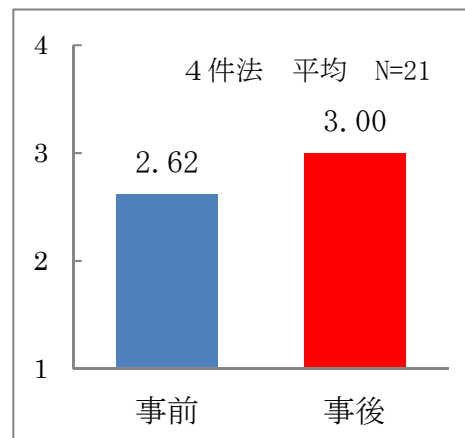


図5 意識調査②

ウ これまで学んだことを通して、自分の生活や将来の生き方について考えたことがありますか。

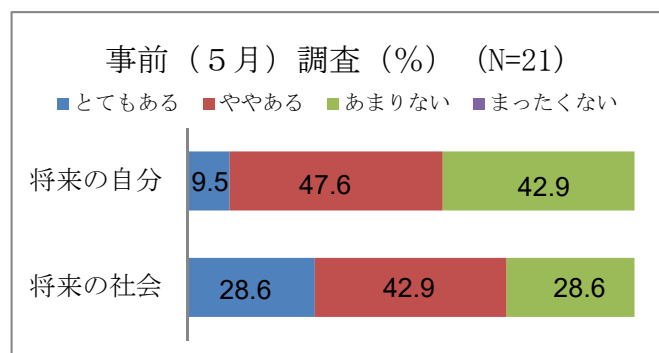


図6 将来の自分と社会についての意識調査①

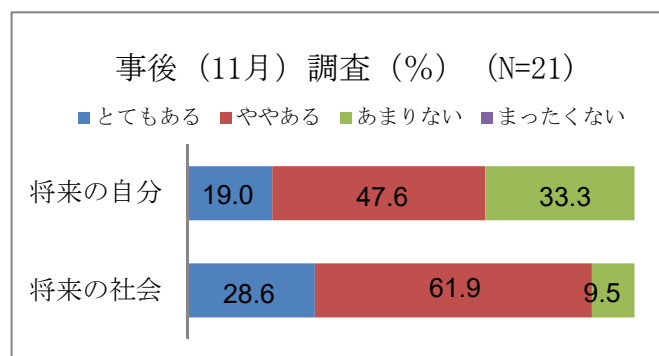


図7 将来の自分と社会についての意識調査②

③ 将来への思いや責任

ア ②の意識調査の結果に関する事後の児童の自由記述は、次のようになった。

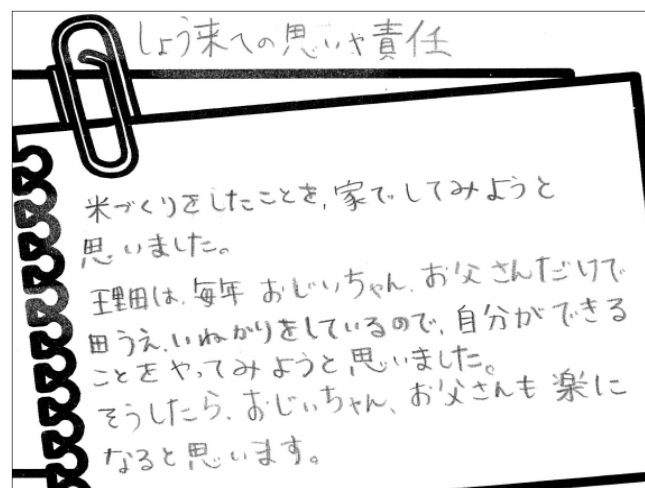


図8 将来への思いや責任についての記述

その他に・・・

- ・学習したことを生かして、たくさんの人たちに農家の方の思いを伝えていきたい。
- ・農家はするかわからないけど、自分の生まれた地域の役に立てるようにがんばりたいです。
- ・将来南関町に残って、米作りをしようかなと思いました。（同6人）

④ 考察

今回、総合的な学習の時間において、整理・分析の過程に思考ツールを取り入れながら、児童生徒の思考力の向上を目指した。

その結果、意識調査等（図9、10）から分かるように、思考力が育成される整理・分析の場面でも95.2%の児童が「とてもある」「ややある」と回答し、大幅な向上が見られた。

思考ツールについては、他教科での学習に活用することで、その効果を児童が実感している。さらに、他者との意見交流において、見える形で表現された他者の様々な考えを基に、意見交換や話し合いが充実した。

今後もさまざまな学習や生活において、このような思考ツールを活用し、よりよく考え、行動につなげていく姿を期待している。今後も継続して、活用を進める必要がある。

また、今回、研究対象校の総合的な学習の時間においては、年間計画に沿って学習を進めてきていたが、より地域や学校が目指す児童像に向かう学習を充実させるために、21世紀型能力の実践力の一つである「将来への思いや責任」を根底において、学習を進めた。

その結果としての意識調査は、図9、10のようになった。課題設定、情報収集では、「あまりない」「まったくない」といった項目に回答した児童はいない。この2つの過程で、大きく数値を伸ばしていることがわかる。

ただし、まとめ・表現においては改善が見られるもの、「あまりない」と回答した児童が23.8%いた。この点については、今後も児童の実態に合わせ、まとめ・表現などの場面で活用する取組を進めるなど、改善に向けて取り組まねばならない。

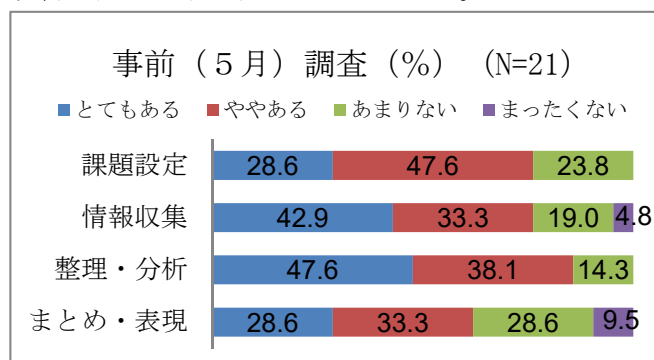


図9 探究的な学習の各過程における意識調査①

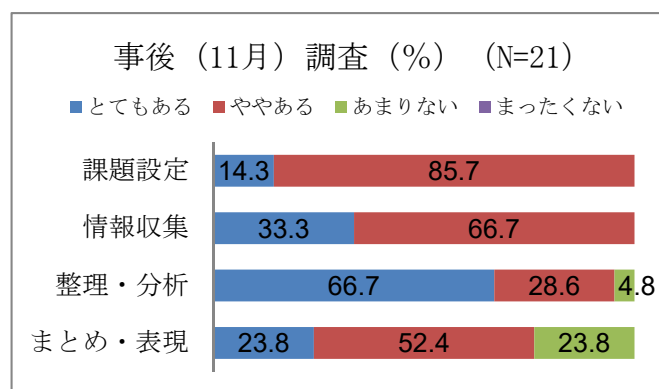


図 10 探究的な学習の各過程における意識調査②

今回の研究において、多くの児童がこの米作りの学習を通して、将来の生き方や地域社会に目を向け、将来への果たすべき責任についても考察を深め、貴重な学びを獲得していることがわかる。

今後、キャリア教育の視点も合わせて、総合的な学習の時間を地域と共に創り上げていく活動をさらに充実させていかねばならない。

検証 2 鹿本高等学校第 1 学年

単元名 「成功へのエチュード

～バーチャル市役所プラン～

(1) 本単元の授業設計

① 児童生徒の実態から

1 年生 240 人で普通科に 202 人、普通科体育コースに 38 人が在籍しており、4 年制大学を希望している生徒が大半を占める。素直で真面目な生徒が多い。

アンケートの結果では、自分の生活や社会から課題を探る姿勢や問いを立てたり、わかりやすく発表したりすることは苦手としている生徒が多いが、協働・協調的な学びへの取組意識については、概ね高い数値を示している。物事に前向きに取り組む姿勢が見られるなどの積極性があり、今後の成長が楽しみである。

② 学習課題の設定

本単元では、クラスを解体し、生徒は希望する 7 課に配属され、バーチャル市役所の各課員として活動する。山鹿市の現状を知り、自ら設定した課題に対して探究的な学習の過程を通して、地域への理解を深めながら自らの在り方を考える態度を育てる。また、協働しながら問題解決に向かう際、思考ツールを使う等、必要な手法や学び方を身につけたり、

集団の中で個人が果たしたりする役割に気づかせる。

また、探究的な学習の過程「課題設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」を一方向のみで進めるのではなく、必要に応じて、逆方向へ過程を戻しながら、学習の過程をより確実なものとする。

本単元は 19 時間計画で、8 月から 3 月（1 単位）の実施である（表 2）。

表 2 本単元の学習計画

時間	学習活動 ＜探究的な学習の過程＞ (学習形態)	指導上の留意点 【3つの視点】
1	オリエンテーション ・山鹿市長による講話 ・過去の全体発表会の視聴 (帯)	単元の最終的な姿をイメージし、見通しをもたせる。
3	＜課題の設定①～③＞ ・各課内での班編制 ・課題の設定 ・思考の拡散，収束 (帯)	【視点 1】 ・自分ごととしての課題設定 ・豊かな関わり合いと挑戦的な課題設定 【視点 3】 ・安全安心な学習の場 ・明確な役割分担
3	＜情報の収集①～③＞ ・情報の収集 (単)	各自が責任を持って必要な情報が収集できるようにする。
1	＜整理・分析①＞ ・企画原案作成 (帯)	現状から効果まで流れを踏まえさえる。
2	＜まとめ・表現①②＞ 兼＜情報の収集④⑤＞ 「アクセルタイム」 ・外部講師へのプレゼン ・外部講師からのアドバイス (帯)	専門家である外部講師へ積極的に質問する姿勢を持たせる。

2	<整理・分析②③> ・アドバイスの整理 ・企画原案の再検討 (帯)	【視点2】 ・内容に応じた思考ツールの選択
4	<整理・分析④～⑦> 兼くまとめ・表現③～⑥> ・企画原案のまとめ ・発表準備 (帯)	【視点2】 ・思考過程の整理
3	<まとめ・表現⑦～⑨> ・課内発表会 ・全体発表会 ・相互評価 ・単元の振り返り (帯)	振り返ること で、自らの成長 に気付かせる。

※(帯)は、クラスを解体し、各課で取り組むため、全課同一時間帯で実施する。

(単)は、クラス毎に異なる時間帯で実施する。

(2) 検証授業の実際

① 本時の学習 11/19 時間 <整理・分析②>

<目標> ・企画原案とアクセルタイムでのアドバイスを整理する際、適切な手法が選択できるようになる。 ・協議を行う中で、自他の考えを交流させながら、企画原案を工夫改善することができるようになる。		
過程	主な学習活動	教師の指導と評価等
導入	1 これまでの取組の振り返りと本時の目標の確認	○課題設定の際に作成したウェビングマップに、アクセルタイムでのアドバイスを反映させることで、今後の取組のポイントをつかませる。
		
写真1 ウェビングマップに加筆		

展 開	<学習課題> これまでの情報を思考ツールを用いて整理し、企画原案の再検討を行う。	
	2 アドバイスの整理と企画原案の再検討をする。	○ポートフォリオ（ウェビングマップ、ロジックツリー、アクセルタイム報告用紙、企画練り直しシート等）の有効活用を促す。
	(1) 思考ツールの選択	【視点2】 整理・分析するために適切な手法を選択させる。
	(2) 協議	○互いの考えを傾聴し、肯定的に捉えるよう促す。
	(3) 協議が停滞した際の情報収集	○机間支援は必要最小限に留め、机外観察を行う。
		
写真2 思考ツールの選択 (この班はBS+KJ 法的手法を選択)		
		
写真3 企画原案について協議		



写真4 資料の活用

整理	3 本時の振り返りと次時の内容を確認する。	
	(1) 振り返りと自己評価	○次時への意欲につなげる。
	(2) 今後の日程確認	○見通しを持たせる。

(3) 検証結果と考察

① 「探究的な学習」の過程への取組

文部科学省高等学校各教科等教育課程研究協議会総合的な学習の時間部会で、探究的な学習において、特に「整理・分析」の活動の工夫改善が指摘されている。鹿本高等学校の1年生においても「課題設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の4過程のうち、「整理・分析」の過程を苦手としている傾向が見られた(図11)。

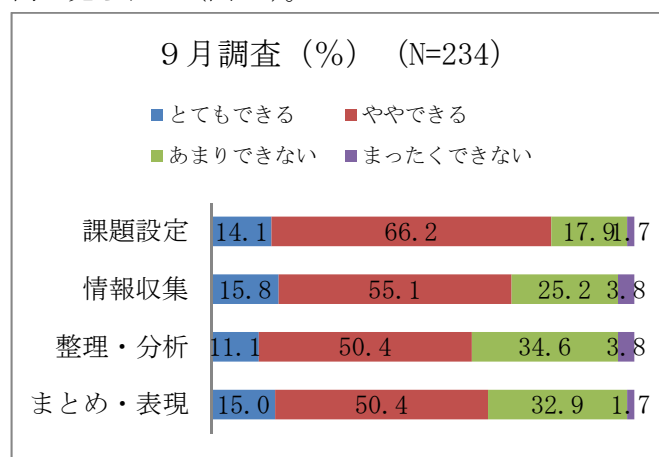


図11 探究的な学習の各過程における意識調査①

今回、探究的な学習の過程「課題設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」を一方向のみで進めるのではなく、必要に応じて、逆方向へ過程を戻しながら、学習の過程をより確実なものとする工夫を行った。検証授業の11時間目が終了した12月に同様のアンケートを実施したところ、4過程すべてにおいて向上が見られ、「あまりできない」は半数以下、

「まったくできない」と回答した生徒は皆無であった(図12)。単元の終了が3月であるため、今後の結果が楽しみである。

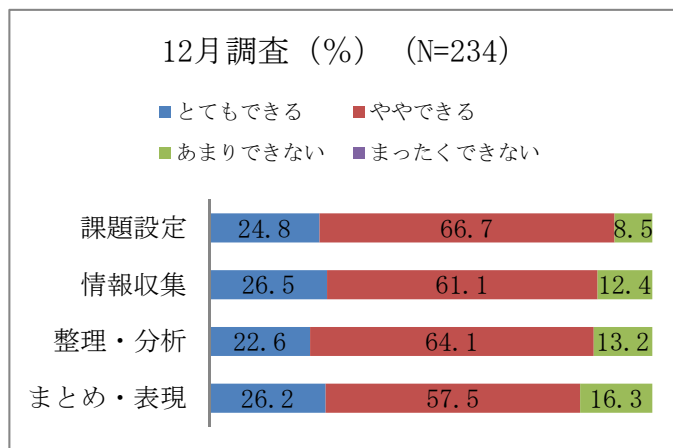


図12 探究的な学習の各過程における意識調査②

② 「探究的な学習」における思考と思考ツール

検証授業の11時間目に各班で内容に応じて適切な手法が選択できるよう、前時までの過程における思考と思考ツールについて、以下のように整理した(表3)。

表3 各過程における思考と思考ツール

過程	思考	思考ツール
課題の設定	発想	BS+KJ 法的手法
課題の設定	拡散	ウェビングマップ
課題の設定 情報の収集	収束・深化	ロジックツリー
外部講師からのアドバイス		
整理・分析	再検討	各班で選択

また、これらの活動を通しての自分が成長していると思うところや、どのような力がついていると思うかについて、以下のような記述が得られた。

- ・物事をいろいろな角度から見れるようになってきたと思う。一つの意見に流されるのではなく、こうした方がいいんじゃないか、こうしてもいいんじゃないかということを考えられるようになったと思う。
- ・普段考えないような視点から見て、いろいろな意見を持てるようになった。
- ・情報を複数調べてクロスチェックすることで、確実性を持たせている。
- ・調べ物をしてわかったことをそれだけで終わらせず、そこから何がわかるのか、それによって何が

起こるかを考えることができている。

以上のように、何となく協議を行うのではなく、思考ツールを用いての活動は、【視点1】学びを引き出す、【視点2】学びを振り返ることについて有効であるといえよう。

③ 明確な役割分担

各自で情報の収集をする前に、ロジックツリーを用いて班内での役割分担を行った（図13）。

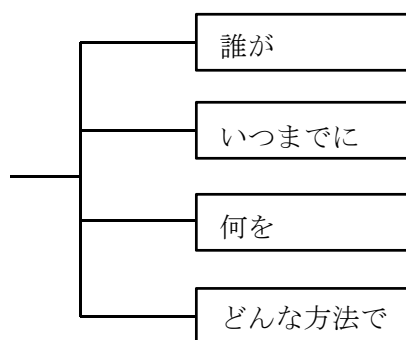


図13 ロジックツリーの一部

生徒達からは、以下のような記述が得られた。

- ・自分の調べなければいけない所を責任を持ってきちんと調べることができた。
 - ・自分の仕事への責任感がついたと思う。
 - ・自分で情報を集めて、課題を見つけることができた。
 - ・自分で調べたり、表現したりすることで、相手にきちんと自分の考えが伝えられるようになった。
- このように明確に示すことは、【視点3】学びを支えることについて有効であるといえよう。

④ 将来の自分と社会についての意識

9月と12月に、「将来の自分／社会について、考えたことはありますか」という意識調査を行った（図14、15）。

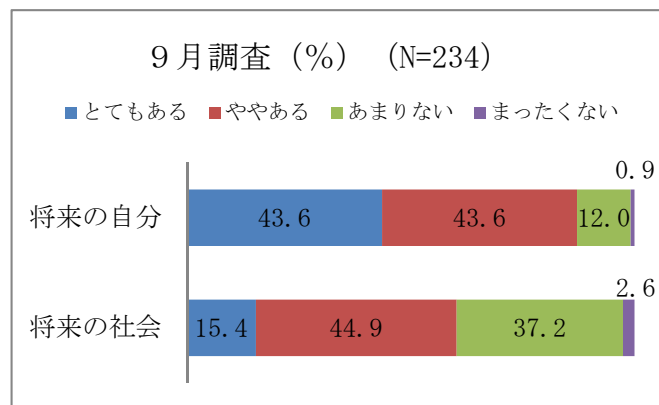


図14 将来の自分と社会についての意識調査①

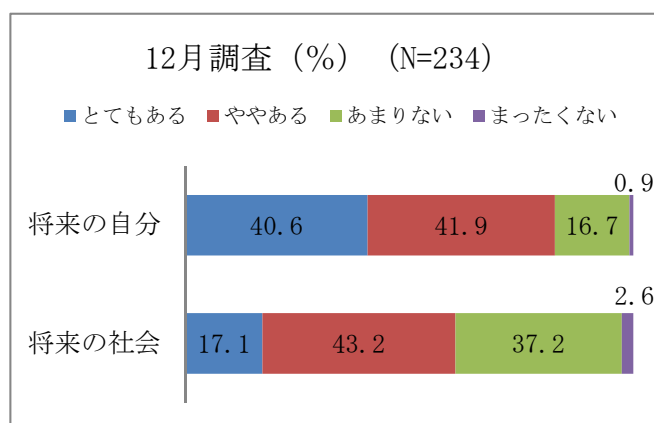


図15 将来の自分と社会についての意識調査②

その結果、将来の自分についても社会についても9月と12月でほとんど差は見られなかった。地域の現状についての視点に終始してしまったことが、将来の自分や社会について意識を向上させることができなかった原因と考えられる。ESDや地方創生の視点を意識させる手立てが必要であった。

しかし、一部の生徒達からは、以下のような記述が得られた。

- ・自分の意見を持って行動できるようになってきていると思う。後はもっと将来のことを考えられるようになりたい。
- ・現状を調べ、知り、改善点を見つけ考察していく力、将来を見据える力がついてきていると思う。
- ・どの年代のためにどのような働きを私達ができるのかについて、たくさん考えることができるようになった。
- ・将来子どもとの関わりがある仕事に就きたいので、現在の少子化についてどのような対策が必要かを考えている。

⑤ 考察

本単元は3月末まで続き、検証考察は12月段階のものである。

「探究的な学習」の4過程において、「整理・分析」の過程を苦手としていることが、文部科学省高等学校各教科等教育課程研究協議会総合的な学習の時間部会での指摘だけでなく、鹿本高等学校でも意識調査で明らかになった。今回の取組を通して、この過程だけでなく全過程で生徒の意識向上が見られたのは、活動の過程を一方向のみで進めるのではなく、必要に応じて、逆方向へ過程を戻しながら、学習の過程をより確実なものとする工夫を行ったことが要因

として考えられる。

そして、何より生徒達が自ら体験することで得られた自信によるところは大きいだろう。生徒の安心した活動の背景には、担当学年団による事前の学習会で教師自身が思考ツールを体験し、生徒達の思考をどうつなぐか検討したこと等があり、【視点3】学びを支える要素の一つとして機能しているものと思われる。

また、何となく協議を行うのではなく、思考ツールを用いての協議は、【視点1】学びを引き出すと【視点2】学びを振り返ることについて有効であった。外部講師からのアドバイスを受け、企画原案を再検討していく際、ある班は、ウェビングマップでいったん思考を拡散させた後、視点を増やして協議を行っていた。協議の終盤、一人の班員が時間を確認し、「クローズ、クローズ」と言ったところで、ロジックツリーを用いた思考の収束と役割分担に移っていた。このように、見通しをもって活動したり、班員で一つの課題に複数の視点からアプローチしたり、協議しながら高め合える姿は、21世紀に求められる資質・能力を表したものであると捉えることができる。生徒の言う「一見関係ないようにみる情報もつなげて、友人の考えを取り入れて、1つの案を作り上げていく力」が付き、「いろんな人の情報や考えを聞くことで自分の考えを見直すことができるし、話し合いもうまくなっていく」姿が見て取れる。

総合的な学習の時間は、教師が教科を越えて担当するため、授業改善の切り口としても、学校における活性化としても、その取組は大きな影響力を持つ。中央教育審議会教育課程企画特別部会における論点整理（平成27年8月26日）が示すアクティブ・ラーニングの具体的な学習プロセスと、総合的な学習の時間における「探究的な学習」は、密接にリンクしている。各教科と総合的な学習の時間、特別活動の年間指導計画を一覧にした「単元配列表」を作成することで、カリキュラムマネジメントの視点でも教育課程の総体的構造の可視化ができると考えている。

3 研究のまとめ

(1) 本研究の成果

① 昨年度までの成果（取組は小学校のみ）

【視点1】については、ジグソー活動やクロストーク活動を取り入れ、人との関わりを通して、お互いに深くかかわり合いながら思いを伝えあうことから学びを引き出していった。

【視点2】については、比較、分類などの視点を具体的に与え、児童相互の学習の評価に役立てることができた。

【視点3】については、子どもたち一人一人に学習の見通しを持たせることや既習事項の教室掲示や学習規律などの工夫を行い、次の学びにつなぐことができた。

② 本年度の成果

本年度は、育てたい資質・能力の構造化（イメージ）（国立教育政策研究所，2013，p.26）の未来を創る（実践力）の中の「持続可能な社会づくり」に重点を置き、3つの視点を生かした研究に取り組んだ。

その結果、小学校・高等学校において、地域における住民、市民としての「立場を与える」ことにつながった。それは、総合的な学習の時間において、地域を題材とすることで見出される様々な問題に、児童生徒が対峙し、「自分に何ができるか」という自分事として課題を捉え、その過程や成果として、「人の役に立つ」あるいは「人の役に立ちたい」という郷土の将来への思いや責任について、みんなで取り組む学習へと発展した。

さらに、探究の意欲が高まり、次々と生まれる課題をさらに探究し、スパイラルアップしていく総合的な学習の時間の活性化につながった。

(2) 今後の課題

今回の研究は、新しい学習指導要領改訂の視点のうちの一つである「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（人間性や学びに向かう力等）」に密接に関連している。今後、新しい時代に必要となる資質・能力を育成するために、総合的な学習の時間の存在は、より高まっていくと考えられる。

21世紀に求められる資質・能力を総合的な学習の時間の計画に明確に位置付けることで、総合的な学習の時間は活性化し、これからの育成すべき資質能力の核となる。

未来を切り拓く力を備えた児童生徒像を地域と学校が確認し、共有し、その育成に一体となって取り組む新しい時代の総合的な学習の時間の研究及び具

— 総合的な学習の時間 —

体的実践を積み重ねていく必要がある。

《引用・参考文献》

- ・小学校学習指導要領（平成 20 年 3 月 文部科学省）
- ・高等学校学習指導要領（平成 21 年 3 月 文部科学省）
- ・小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編（平成 20 年 6 月 文部科学省）
- ・高等学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編（平成 21 年 12 月 文部科学省）
- ・今，求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（小学校編）（平成 22 年 11 月 文部科学省）
- ・今，求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（高等学校編）（平成 25 年 7 月 文部科学省）
- ・育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会— 論点整理—（平成 26 年 3 月 31 日 文部科学省）
- ・中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」（平成 27 年 8 月 26 日 文部科学省） 他